萬葉集「いきのを」考

鈴木　喬

一、

「いきのを」は『[1]萬葉集』において十五例みられ、『[2]古今和歌集』以降になると用いられることが少ない歌表現である（『古今和歌集』の使用例はない）。「いきのを」について、北村季吟『[3]萬葉拾穂抄』や契沖『[4]萬葉代匠記』（精撰本）が『萬葉集』六四四番歌の語釈で指摘して以降それを踏襲する注釈書が多く、

「いきのをは命也命の如く別おしく思ひし君」『萬葉拾穂抄』

「気乃緒ハ命ナリ。命アル程ハ、息ノ絶ネハ、息ヲツナク緒ノ意ナリ。気ノ緒ニ念トハ命ニ懸テ思ナリ」『萬葉代匠記』（精撰本）

「いきのを」を「命」と同じ意で解釈されている。また、それが修飾するのが想いであることから「いきのをに」は「命がけで」や「命綱のように」と意訳されている。「命綱」としての解釈は、「いき」【生】が「いのち」、「を」【緒】が紐状の「綱」としてとらえたものである。また『萬葉代匠記』（初稿本）において「いきのを」を「玉の緒」と同じ意のものと解釈され、その指摘に従う注釈書も多い。

しかし、「命がけで」と「命綱のように」とでは、[5]原田留美が指摘するように、現代語における解釈としてずれがある。前者の「命がけで」が主体の強い意志のあらわれであるのに対し、後者の「命綱のように」は、すがりつく対象として相手を表現する。両者は決して重なるものとは言い難い。

また「いきのを」と「玉の緒」を同じものをさすと指摘されるが、『萬葉集』における「いきのを」は、助詞「に」を後接し、「思ふ」や「恋ふ」を修飾する。それに対し、「玉の緒」は助詞「に」を後接せず、また「思ふ」や「恋ふ」

ではなく「長く」「絶ゆ」にかかる。このことから「いきのを」と「玉の緒」は語形の上では近似するものの、表現の上で大きな差異があると考えられる。

二、

『萬葉集』中の「いきのを」は、「息緒」（一例）「生緒」（一例）「氣緒（氣之緒）」（十一例）「伊吉能乎」（二例）で記され、全例が助詞「に」をともない「いきのをに」と訓まれている。またそのほとんどが「思ふ」「恋ふ」などの動詞を修飾し、「相手への想いの強さ」を強調する。「いきのをに」を持つ歌を概観すると次の通りである。

①今は吾は　わびそしにける　**いきのをに**（**氣乃緒尓**）　念ひし君を　ゆるさく思へば　（4六四四）

（今となっては、もう私はうちひしがれるばかりです。**いきのをに**（私が）思っているあなたを引き留められなくなったことを思うと）

題詞に「紀女郎怨恨歌」とあるように、心変わりをした男が自分のもとから離れていくことを嘆く、紀女郎の歌である。「いきのをに念ひし」が「君」を修飾し、「いきのをに」が相手への想いの強さをあらわす。「ゆるさく」は「ゆるす」のク語法であり、二人を結んでいた心の綱を解きゆるめることをあらわす。「緒」が「綱」を喚起した表現であり、二人の心が強く結ばれ一つの状態である「緒」が、「私」の心が安定した状態であることをあらわす。

②なかなかに　絶ゆとし云はば　かくばかり　**いきのをに**（**氣緒尓**）して　吾戀ひめやも　（4六八一）

（いっそのこと別れようと言って下されば、このように**いきのをに**私は（あなたを）お慕いするものでしょうか）

題詞に「大伴宿禰家持が交遊と別るる歌」とあり、別離の歌である。友人との別離に際して自身の想いの強さを「いきのをにして戀ひめやも」と歌う。また「かくばかり」と修飾することによって「いきのを」が程度の強さを強調している。

③**いきのをに**（**氣緒尓**）　念へる吾を　山ぢさの　花にか公が　うつろひぬらむ　（7一三六〇）

（**いきのをに**思っている私なのに、山ぢさの花のように、あなたの心が変わってしまったのでしょうか。）

作者未詳歌で、譬喩歌「寄花」に分類される。表現内容から①と同様、相手の心変わりを嘆く歌である。変わらぬ自身の想いを「いきのをに思へる」と表現し、主体である「我」を修飾する。相手の「うつろふ」心と、我の「いきのをに思へる」が対比的に表現されている。「うつろふ」と対比される「いきのをに思へる」は、変わらぬ想いが象徴的にあらわされている。

この一三六〇番歌の「いきのを」について伊藤博『萬葉

集釋注』（集英社）は、「命」や「命がけ」といった意であることに加え、「「息の緒」は緒のように細々と続く息。苦しさを思う状況の中でわずかな生を意識した時に用いられ命の極限状態を表わす」と指摘する。しかし、伊藤博が指摘する「わずかな生」の意識や「極限状態」をさす表現性は当該歌を含め、「いきのを」を含む歌からは看取することができない。

④玉だすき　懸けぬ時なく　**いきのをに**（氣緒尓）　吾が念ふ
公は　うつせみの　世の人なれば　大王の命恐み　夕去れば
　鶴が妻喚ぶ　難波がた　三津の埼より　大舶に　ま梶しじ
貫き　白浪の　高き荒海を　嶋傳ひ　い別れ往かば　留まれ
る　吾は幣引き　斎ひつつ　公をば往らむ　早還り　ませ
（８一四五三）

（心にかけて思わない時はなく、**いきのをに**私が思っているあなたは、この世に生きる人として大君の仰せを畏んで、夕方になると鶴が妻を呼んで鳴く難波潟の三津の崎から、大船の櫂を多く取りつけ、白波の高くたつ荒海を、島伝いに別れて唐へ別れ行くならば、留まり残る私は幣を手向けをし、ご無事をお祈りしながらあなたをお送りいたしましょう。早くお帰りになってください。）

題詞に「笠朝臣金村が入唐使に贈る歌」とあり、入唐使に対する笠朝臣金村の送別の歌である。「いきのをに」は「思ふ」にかかり、「君」を修飾する。「玉だすき懸けぬ時なく」と心で思わない時がないことが表現され、想いの強さが強調されている。「いきのをに」とともに「思ふ」を修飾する「懸けぬ時なく」は、当該歌を含め『萬葉集』において六例あり、「玉だすき　懸けぬ時なく　口止まず　吾が恋ふる児を」（９一七九二）のように全例が「片時も忘れることなく思ふ」ことを強調する。

⑤いかといかと　ある吾がやどに　百枝さし　おふる橘　玉に貫
く　五月を近み　あえぬがに　花咲きにけり　朝にけに　出で見
る毎に　**いきのをに**（氣緒尓）　吾が念ふ妹に　銅鏡　清き月夜
に　ただ一眼　見するまでには　落りこすな　ゆめと云ひつつ
幾許　吾が守る物を　うれたきや　しこ霍公鳥　暁の　うら悲し
きに　追へど追へど　なほし来鳴きて　徒に　地に散らさば　す
べをなみ　攀ぢて手折りつ　見ませ吾妹児　（８一五〇七）

（今日はどうかどうかと、心にかけていた我が家の庭に、枝が多く茂っている橘は、玉に通す五月が近いので、こぼれ落ちるばかりに花が咲きました。朝に昼にと、いつも庭にでてその橘を見る度に、**いきのをに**私が思うあなたに、清く澄む月のもとで、ただ一目でも見せるまでは、決して散らないでおくれ、と言いながら、こんなに私が気をつけて見守っているのに、何とも忌々しいことか、ホトトギスが、明け方のもの悲しい時に、追い払っても追い払っても来て鳴いて、むやみに花を地に散らすので、どうしようもなく手折ったのです。御覧下さい。愛しきあなたよ。）

この歌は大伴家持が妻である坂上大嬢に花橘の枝とともに贈った歌であり、「いきのをに吾が念ふ」で「妹」を修飾する。

「ここだくも」は、

・相見ては　幾日も経ぬを　ここだくも　くるひにくるひ　念ほゆるかも（4七五一）

（お会いしてから幾日も経っていないのに、こんなにもひどく狂わんばかりに思われることよ）

・あまざかる　ひなともしるく　ここだくも　しげきこひかも　なぐる日もなく（17四〇一九）

（都から遠く離れた田舎にいるだけに、こんなにもしきりつのる恋しさよ。心静まる日もなく）

後接する動作を強調する。一五〇七番歌は、「ここだくも」が「吾が守る」を、「いきのをに」が「吾が念ふ」を修飾し、対比的に表現されている。

⑥**いきのをに**（**息緒**）　吾は念へど　人目多みこそ　吹く風に　有らばしばしば　相ふべきものを（11二三五九）

（**いきのをに**私は思っているのだけれども、人目が多いものだから（逢うことが叶わない）、（私が）吹く風であったならば、たびたび逢えもしように）

旋頭歌の一首。「吾」の思いに反し、人目の多さ故に逢うことが叶わないことを歌う。その「吾」の想いを「いきのをに」が強調する。

⑦**いきのをに**（**氣緒尓**）　妹をし念へば　年月の　往くらむ別きも　念ほえぬかも（11二五三六）

（**いきのをに**あの娘を思うと、年月の過ぎゆく別も分からなくなってしまった）

「いきのをに妹をし念へば」と順接確定条件句をうけ、その結果である「年月の往くらむ別きも念ほえぬかも」と心が乱れた極限状態を歌う。その原因は、妹への想いが「いきのをに」の状態であることであり、「いきのをに」が並々ならないものであることがわかる。また「思ほえぬかも」は当該歌を含め四例あり、他の三例は「長き心も念ほえぬかも」（7一四一三）のように「心」について分からないことをうたう。そのため「わきも」は分別や区別の意とともに、それを正常に把握することができる「私の心」の状態が乱れていることを暗示している。また「わき」は

・夜晝と　云ふ別き知らず　吾が戀ふる　情はけだし　夢に見えきや（4七一六）

・なかなかに　死なば安けむ　出づる日の　入る別き知らぬ　吾しくるしも（12二九四〇）

「知らず（ぬ）」と呼応し、相手のことしか考えられないという想いの強さやその極限状態を表現する。またその想いの強さは「苦しみ」を導く。

⑧**いきのをに**（**生緒尓**）　念へば苦し　玉の緒の　絶えて乱れな　知らば知るとも（11二七八八）

（**いきのをに**思うと苦しい。玉の緒のように思い乱れようか。人が知るなら知ろうとも）

「いきのをに念ふ」が順接確定条件「ば」をうけ「苦し」

を導く。「いきのをに」で表現される相手への想いの強さが苦しさを生じさせている。またこの歌は「玉の緒」とともにうたわれ、「玉の緒」は「絶ゆ」を導いている。当該歌は「いき」の書記形態において「生」字を用いている。『萬葉集』において「いき」は「氣」字が多く用いられている。そのため「氣緒（氣之緒）」が書記形態として一般的（無標）であるとすると、この「生」字は表意的（[6]有標性）であると指摘することができる。「生」字は、歌の表現内容、及び「苦」「絶」との視覚的な対応関係から用いられたものと考えることができる。

⑨朝霜の　消ぬべくのみや　時無しに　思ひ度らむ　いきのを（氣之緒）にして　（12三〇四五）

（朝霜が消えてしまうように、絶え間なく思いつづけることであろうか。いきのをにして）

「いきのをにして」は倒置表現で「思ひ度らむ」にかかる。「いきのをに」と想い続けることを、前部の「朝霜の消ぬべくのみや時なしに」が表現している。「朝霜の消ぬべくのみや」といった表現からは「命がけ」といった主体の持つ強い意志は読みとることはできない。「時なしに」は『萬葉集』において三例みられ、

・千鳥鳴く　み吉野川の　川の音の　止む時なしに　思ほゆる公（6九一五）

全例が「思ふ」「恋ふ」にかかり、「止む時なしに」と絶え間なく続くことをあらわす。

⑩いきのをに（氣緒尓）　あが氣づきし　妹すらを　人妻なりと聞けば悲しも　（12三一一五）

（いきのをに（思うと）私が息苦しくなるあなた、人妻だと聞くと、とても悲しい）

問答歌の一首であり、「いきのをに」が「思ふ」ではなく「いきづきし」にかかった例である。「いきづく」は『萬葉集』中、嘆きの心情をあらわした歌に用いられる。思いつめたことによって身体に作用し、嘆息として出ることを表現する。極限状態の想いが表現される。

⑪いきのをに（氣緒尓）　吾が念ふ君は　鶏が鳴く　東方の坂を今日か越ゆらむ　（12三一九四）

（いきのをに私が思っているあの方は、東の坂を今日あたり越えているのだろうか）

「いきのをに吾が念ふ」が「君」を修飾している。三一九四番歌は、巻十二の「悲別歌」に分類されており、都から遠く離れた東国を旅する、愛しい男への想いを歌ったものである。

⑫古ゆ　言ひ續ぎけらく　戀すれば　不安しきものと　玉の緒の　継ぎては云へど　處女らが　心をしらに　其を知らむよしの無ければ　夏麻引く　命かたまけ　かり薦の　心もしのに　人知れず　もとなそ戀ふる　いきのをに（氣之緒）して（13三二五五）

（昔からの言い伝えには、恋をすると苦しいものだと玉の緒のよ

うに長く言い継がれているが、あの娘の本心がわからず、それを知るすべがないので命を傾けて、心もうちしおれて人知れず無性に恋い焦がれている、**いきのをにして**）

「いきのをにして」は「命かたまけ」「心もしのに」「もとなそ」とともに「恋ふる」を修飾している。相手の気持ちが分からないものの、ひたすら恋い焦がれ、その苦しみをうたう。「命かたまけ」という表現から「命がけ」という現行の解釈に通じるものをよみとることができる。しかし、「もとな」によって、主体の強い意志を肯定することはできない。「もとな」は

・吾妹子が　咲まひ眉引き　面影に　かかりてもとな　念ほゆるかも　（12二九〇〇）

・ほととぎす　なほもなかなむ　もとつぎと　かけつつもとな　あをねしなくも　（20四四三七）

のように、「面影」や「声」等を契機として、感情が揺さぶられ無性に恋しく想うことをうたう。また次の⑬⑮にも「もとな」がみられる。

⑬うちはへて　思ひし小野は　遠からぬ　其の里人の　標結ふと　聞きてし日より　立てらくの　たづきも　知らに　居らくの　おくかも知らに　にきびにし　わが家すらを　草枕　客宿のごとく　思ふ空　不安しきものを　なげく空　過ぐし得ぬものを　天雲の　ゆくらゆくらに　蘆垣の　思ひ乱れて　乱れ麻の　麻笥をなみと　吾が戀ふる　千重の一重も　人知れず　もとなや戀ひむ　**いきのをに**（**氣之緒尓**）して　（13三二七二）

（以前から、心に留めていた小野をその近くの里の男が標をしたと聞いた日から、立ち上がるすべもわからず身を置く所さえもわからないほどなので、住み馴れた我が家さえも旅寝のように落ちつかず、思う胸の中も安らかでなく、嘆く胸の中もやるせないものなのに、ゆらゆら心は揺れて思い乱れて麻のように乱れた心を鎮めるすべもなく、私が恋悩む千分の一もあの人に知ってもらえずにじれったく恋焦がれることか、**いきのをにして**）

片想いの女性を他の男に取られ、それでも諦めらることができない男の苦しい恋の心情をうたったものである。「いきのをにして」と「葦垣の思ひ乱れて乱れ麻の麻笥をなみと吾が恋ふる千重の一重も人知れずもとなや」が「恋ひむ」を修飾しており、「息の緒」が心の不安定な状態であることがわかる。「千重の一重も」は『萬葉集』中、五例みられ

・名草山　事にし在りけり　吾が戀ふる　千重の一重も　なぐさめなくに　（7一二一三）

全例が「我が戀」をうけ、恋情における他者には計りしれない、深い想いの表現として用いられている。また他にまぎれることが無いことをうたい、自分自身ではどうすることのできないことをうたう。

⑭天照らす　神の御代より　安の川　中に隔てて　向かひ立ち　袖振りかはし　**いきのをに**（**伊吉能乎尓**）嘆かす児ら　渡り守　舟も設けず　橋だにも　渡してあらば　その上ゆも　い行

き渡らし　携はり　うながけり居て　思ほしき　事も語らひ慰むる　心はあらむを・・・（18四一二五）

（天照大神の神の御代から今までずっと、安の川に中を隔てられたまま向かいあって立ち、互いに袖を振り合って、**いきのをに**嘆くお二人、渡し守は舟の用意もしてくれず、せめて橋でも渡してあったら、その上を通って渡って行き、手を取りあい肩組みあっては、思いのたけを話し合い、それで心が慰められることもあるだろうに、・・・）

七夕歌であり、家持が織女と牽牛をよんだものである。「息の緒に」が「嘆かす」を修飾し、逢えないことをうたう。「神の御代より」の表現からその想いによる嘆きの長さが強調される。

⑮白雪の　ふりしく山を　越えゆかむ　君をそもとな　**いきのをに**（伊吉能乎尓）念ふ

左大臣、尾を換へて云ふ、「いきのをにする」と。然れども猶し喩して曰く、前の如く誦め、と。（19四二八一）

（白雪の　降り積もる山を　越えて行こうとするあなた、そのようなあなたを、むしょうに　**いきのをに**思っています）

「但馬按察使橘奈良麻呂朝臣に餞する宴の歌」である。家持が奈良麻呂との別離をうたった歌である。左注に注目すべき記述がある。結句が「いきのをにする」という可能性もあったが、結果として「いきのをに念ふ」の表現におさまったことを記述する。この「息の緒にする」は、東歌の

・あずの上に　駒を繋ぎて　危ほかど　人妻児ろを　息に我がする（14三五三九）

「息に我がする」と表現の形式において似ている。この東歌は、「息」は「命」と同じ意として解釈でき、そのため「息の緒」が「命」であることの裏付けともなる。しかし、当該⑮歌では「いきのをに」は「する」ではなく「おもふ」にかかることから表現の型として成立していたと見ることができ、「いきのをにおもふ」という表現の形式に優位性が認められる。

以上「いきのを」について全例を概観した。「いきのを」は、家持を中心とする『萬葉集』第四期の歌人に集中し、比較的新しい表現様式であったことが指摘できる。また「いきのを」は、相手に対する自身の強い想いやそれによる極限状態を表現する。その多くが恋の歌で用いられており、④「かけぬ時なく」や⑨「時なしに」、⑭「神の御代より」から、思いの長さや継続性として程度の強さを強調する。この「継続性」については、荒木田久老『[7]萬葉考槻乃落葉』に四六〇番歌の「年緒長久」の説明にて

緒はいきのを（緒）たまの緒伴（トモ）の緒などといふ緒にて連續の意なり

とあり、また[8]武田祐吉にも次のような指摘がある。

イキは、気息の義とすべく、ノヲは、他の用例に準じて気息の継続性を表示するものと見るべきである。

（略）

気息は絶えず続いてゐる。呼吸のたびにで、ある場合は、絶えずの意に譬喩として使はれてゐると見るべきであつて、ヲ（緒）は、譬喩によってイキ（気息）の長いことを表示するのだろう。

しかし、「いきのをに」とそれにかかる語との連合表現は、単に「9継続性」を表示するものではなく、⑫「命かたまけ」から全身全霊の思いが看取でき、相手に対する激しい想いがわかる。またその想いの極限状態によって「苦しさ」を引き起こし、「いきづき」や「嘆かす」といった身体的な動作を引き起こす。そのため⑬のように心の乱れた状態に陥る。また十五例中三例が「もとな」と共起し、「いきのをに」と表現する想いが自身では統制することのできないものであることがわかる。

「いきのを」に対する現行の「命がけで」「命ある限り」といった、現代語の感覚で主体の強い意志をあらわす現代語訳では、「もとな」（無性に）の解釈を難しくさせる。そもそも恋とは主体の強い意志をもってするものではなく、対象によって引き起こされるものである。そのため「命がけで～思ふ」では恋の本質と外れた表現となる。また「いきのを」と「玉の緒」とが同じで「命」をさすとされるが、一緒に歌われる例が二例（⑧⑫）存在することから、を同一の歌表現とは考えにくい。

三、

次に「いきのをに」の「いき」【息・氣】について考察する。『萬葉集』中、「いき」の用例は、名詞「いき」が五例、動詞「いきづく」が十五例、形容詞「いきづかし」が三例みられる。名詞「いき」は

・…たちまちに　情消失せぬ　若かりし　皮も皺みぬ　黒かりし　髪も白けぬ　ゆなゆなは　氣さへ絶えて　後遂に　壽死にける　水江の　浦嶋子が　家地見ゆ（9一七四〇）

・君がゆく　海辺の宿に　霧立たば　我が立ち嘆く　息と知りませ（15三五八〇）

呼吸の意で用いられ、一七四〇番歌の「息さへ絶えて後つひに命死にける」の表現から、息が絶えてから、命が絶えるまで「後つひに」と時間が生じていることがわかる。息が絶えることと、命が絶えることとが同じではなく、「いき」は身体としての動作やその結果生じるものであり、それが止まることが、完全なる「死」ではないことがわかる。すなわち、「いき」【息・氣】とは「いのち」を構成する一つの要素であり、「いき」と「いのち」は同じものではない。

また三五八〇番歌は「立ち嘆く息」であり、生理現象としての呼吸ではなく、相手を想う心情によって作用（情動作用）された身体的なあらわれとしての嘆きの息と考えられる。これは「いきづく」「いきづかし」も同様であり、

・かくのみや　いきづき居らむ　あらたまの　来経行く年の限り知らずて　（5八八一）

・いくばくも　生けらじ命を　恋ひつつそ　我は氣づく　人に知らえず　（12二九〇五）

・波の上ゆ　見ゆる児嶋の　雲隠り　あな氣づかし　相別れなば　（8一四五四）

思い通りにならないことにたいする情動作用であり、恋人と会えないことに対する嘆きをうたうことが多い。

八八一番歌の「かくのみや」及び「来経行く年の限り知らずて」は、それぞれ「いきのをに」の②「かくばかり」、⑦「年月の行くらむ分きも　思ほえぬかも」の表現と近似する。また二九〇五番歌も「いきのを」⑫の「命かたむけ」と同じ表現といえる。さらに一四五四番歌は、「いきのをに」の④「笠朝臣金村、入唐使に贈る歌」の反歌である。嘆息の行為と、「いきのをに」とが同じ主題をうたっていることが想定できる。

「いきづく」「いきづかし」が「いきのをに」と同じ主題を詠出し、また「いきのをに」の⑩が

⑩**いきのをに**（氣緒尓）　あが氣づきし　妹すらを　人妻なりと聞けば悲しも　（12三一一五）

「氣づきし」と共起することからも、「いきのを」の「いき」は生理現象としての呼吸ではなく、「なげき」や「溜息」など情動による身体の作用とみるべきであろう。つまり「いきのを」の「いき」は「息をする」動作や身体作用であり、「命」と関連づけるべきではないといえる。

「いきのを」「いき」に「命」の意が確認できないが、一方で「を」【緒】の側に「命」の意として使用された例が指摘されている。

・…己が緒を　盗み殺せむと　後つ戸よ　い行き違ひ　前つ戸よ　い行き違ひ　窺はく　知らにと…　（崇神記歌謡）

・己がをを　おほにな思ひそ　庭に立ち　笑ますがからに　駒に逢ふものを　（14三五三五）

これらは「緒」が長いものをあらわすことから、「命」は長く続くものとしてとらえ、表現したものと解釈されている。しかし、和語「を」【緒】に「命」の意があったとしても、次節でみるように、他の「～の緒」の表現において「命」をあらわすものがないことから、「～の緒」において「緒」が「命」の意をあらわしているとは認めがたい。そのため現行の注釈書にみられる「命のかぎり」「命綱として」といった訳は、原文の語感に忠実なものとは言えないことになる。

四、

次に「～の緒」について考察する。『萬葉集』中、「～の緒」の例は、「いきのを」の他に「紐の緒」「年の緒」「心の緒」「玉の緒」[10]等がある。「ヲ」（緒）の語は、紐状の細

長いものをあらわし、「紐の緒」のように実物をあらわすものと、比喩的に用いられ長いことを表示するものがあるとされる。「～の緒」の例を概観すると次のようになる。

「玉の緒」は二十六例あり、その多くが

・玉の緒を　沫緒に搓りて　結べらば　在りて後にも　相はざらめやも　（4七六三）

・葦の根の　懃念ひて　結びてし　玉の緒と云はば　人解かめやも　（7一三二四）

・玉の緒の　くくりよせつつ　末終に　去きは別れず　同じ緒に有らむ　（11二七九〇）

・玉の緒の　間も置かず　見まく欲り　吾が思ふ妹は　家遠く在りて　（11二七九三）

「搓る」「結ふ」「くくる」と実体としての「緒」をあらわし、「間も置かず」は玉に緒を通した情態を念頭に置いた表現である。[11]秋本吉郎によると「玉の緒」には命や魂の意はなく、全て実体としての玉やそれを貫く糸や紐の意で解釈できると指摘される。また「玉の緒」は

・相念はず　有るらむ児故　玉の緒の　長き春日を　念ひ晩らさく　（10一九三六）

・君に相はず　久しくなりぬ　玉の緒の　長き命の　惜しけくも無し　（12三〇八二）

・狂言か　人の云ひつる　玉の緒の　長くと君は　言ひてしものを　（13三三三四）

「長し」にかかり、連合表現として機能する。三〇八二番歌の「長（き）」は「命」を修飾する。三三三四番歌は訃報を聞いた「私」が「あなたは長く」と言っていたのにと嘆いた歌であり、「長い」は命をさしているものといえる。一見すると「玉の緒」が「命」と関連し、うたわれているようにもみえるが、これは実体としての細長い紐状の「緒」を意識したものと考えられ、「玉の緒」が「命」を直接想起させた表現ではない。

・玉の緒を　片緒に搓りて　緒を弱み　乱るる時に　恋ひざらめやも　（12三〇八一）

・玉の緒の　絶えたる恋の　乱れなば　死なまくのみぞ　また も相はずして　（11二七八九）

・恋ふること　益される今は　玉の緒の　絶えて乱れて　死ぬべく思ほゆ　（12三〇八三）

また「玉の緒」が「絶ゆ」にかかる表現もみられ、これも実体としての「玉の緒」から想起されたものと考えられている。そのため「死なまく」「死ぬべく」と共起するものの、「玉の緒」が命として歌われているのではない。

「玉の緒」をはじめとする他の「～の緒」の表現と「いきのを」を比較すると、「いきのを」は接続する助詞において違いを指摘することができる。「玉の緒」は対象をしめす助詞「の」「を」が後接するのに対し、「いきのを」は助詞「に」が後接する。「いきのをに思ふ」のように『萬

葉集』中、「～に、（我が）思（ふ）」の多くは、

・あきづはの　袖振る妹を　たまくしげ　奥に思ふを　見たまへ吾が君　（3三七六）

・一日には　千重波敷きに　念へども　なぞ其の玉の　手に巻き難き　（3四〇九）

・大夫の　去くといふ道そ　凡ろかに　念ひて行くな　大夫をの伴　（6九七四）

「奥に」「千重波敷きに」「おほろかに」といった副詞句である。その副詞句は、実体としてのモノを表現するのではなく、「思ふ」という行為において、状態や程度の大小を表現する。そのため「いきのをに」もそのような副詞句に考えられ、実体としての「緒」をさすとは考えにくい。

次に「紐の緒」は、集中八例あり、

・菅の根の　ねもころ君が　結びたる　我が紐の緒を　解く人は有らじ　（11二四七三）

・白たへの　我が紐の緒の　絶えぬ間に　恋結びせむ　相はむ日までに　（12二八五四）

・何故か　思はず有らむ　紐の緒の　心に入りて　恋しきものを　（12二九七七）

「解く」「結ふ」に承接し、歌表現として男女の仲を暗示する。その表現からは継続性は表現されず、「紐の緒」は実体としての「結ぶもの」「結ばれている」ものを表示する。二九七七番歌は「紐の緒」が「入りて」に懸かり、「[12]紐を結ぶのに一方を輪にし、他方をそれに通す」といった解釈がなされるように、実体としての紐から「結ぶ」行為を連想させ用いている。

「年の緒」は集中十七例あり、すべて助詞を介在することなく「長く」に承接する。

・我が形見　見つつ偲はせ　あらたまの　年の緒長く　我も思はむ　（4五八七）

・あらたまの　年の緒長く　かく恋ひば　まこと我が命　全からめやも　（12二八九一）

・あらたまの　年の緒長く　いつまでか　我が恋ひ居らむ　命知らずて　（12二九三五）

全例が「思ふ」や「恋ふ」を修飾し、長く想うことを表現する。「思ふ」や「恋ふ」を修飾する点において、「いきのをに」との共通点がみられる。

「心の緒」は一例のみで、

・まかなしみ　寝れば言に出　さ寝なへば　心の緒ろ（己許呂乃緒呂）に　乗りてかなしも　（14三四六六）

（愛しさに、寝ると噂に上る。寝ないでいると心の上に（あなたが）乗りかかって切ない）

「を」は「心」の意であると解されている。当該歌は仮名書歌巻に属するが、「を」は正訓「緒」字で記される。一音節としての「を」を訓仮名「緒」で表示することは珍しくはないが、仮に表意兼帯の用法であると仮定する

と、『萬葉集』における「緒」字の「心」意での用法は、題詞左注における「正述心緒」（11二三六八）や「悲緒」（3四七〇）「恋緒」（17三九六七）「愁緒」（17三九七六）「怨緒」（17四〇〇八）等にみえ、また中国における用法にも玉融「琵琶詩」に「[13]意緒」の例がある。そのため「～の緒」は視覚的に表示される用字上の意も考慮する必要がある。「心中感緒」（3四五八）、「感緒御心之中」（16三八三五）において「心の中」とみえることから、「緒」字が単に「こころ」の意をあらわすのではなく、ある事柄によって心が作用したもの、つまり情動作用として考えることができる。

土屋文明『萬葉集私注』（筑摩書房）や澤瀉久孝『萬葉集注釋』（中央公論社）では、「心の緒」を「いきのを」と同じ表現であると考え、その表現するものを継続性と指摘している。ただ「寝れば言に出」「寝なへば～」と仮定条件句を重ねていることに注目する必要がある。その継続性には「寝なへば」と共寝をしないことを必要とする。また三四六六番歌の「心に乗る」という表現は、

・東人の　荷さきの篋の　荷の緒にも　妹は情に　乗りにけるかも　（2一〇〇）

・ももしきの　大宮人は　多かれど　情に乗りて　念ほゆる妹　（4六九一）

・春去れば　しだり柳の　とをを（十緒）にも　妹は心に　乗りにけるかも　（10一八九六）

相手のことが頭から離れず、心を奪われたままの状態と解釈することができ、恋人のことを強く想うことをあらわす。前節で概観した「いきのをに」が用いられた歌の状況を考えると、「心の緒」ではなく「心に乗る」に近いといえるのではないだろうか。一〇〇番歌は「心にしっかりと妹が乗って離れない」ことを「荷の緒にも」があらわし、また一八九六番歌は「とををに」が「十緒」で視覚的に表示される。また「紐の緒」の二九七七番歌が「心に入りて恋しきものを」とうたうことからも、情動作用において「緒」が「心」に働きかけていることがわかる。なお「こころに乗る」という表現は、『萬葉集』第二期の歌人にみられ、第四期の歌人にみられた「いきのを」に先行する。

以上、「～の緒」を考察した。「緒」には「命」という意はなく、また実体として「綱」のようなものをさすことはない。そのため「いきのを」を現代語の「命綱」としてとらえることも無理があるといえる。「緒」は長さや継続性をあらわし、想いの強さを表現する。そして「緒」は心に作用するモノとしてとらえられていたことから、「命」ではなく、むしろ「こころ」やその情動作用としてとらえるべきものといえよう。

五、

「いきのを」は、その語から「命」と関連づけ「命綱」や「命がけ」といった強い意志を持ったものに訳されてきた。しかし、「いきのをに」とあわせて表現される「もとな」を持つ歌句からは、意志を介さない状態があらわされており、「命のかぎり」と主体の積極的な意志の解釈では表現性に整合しない。「〜の緒」の表現されるものは、実体としての「緒」であり、「年の緒」は長さや変わらず続く継続性を表現するものである。このことから、「命」をあらわしていたのではく、「いきのを」も継続性を表現したものと解される。

「年の緒」「玉の緒」は「長く」と語形の上で明示するのに対し、「いきのを」は「長く」を明示せず、助詞「に」によって「思ふ」を修飾する。『萬葉集』中、「〜に＋思ふ」があらわすものは、その思いの程度やその状態をあらわす。また『萬葉集』における「いき」は、情動作用としての嘆息をあらわす。そのため「いきのを」は、継続性や程度の強さをその語形に内包した表現と推測でき、比較的新しい連合表現だったのではないかと推測する。「いき」は生命活動ではなく、嘆息といった心の作用の象徴である。そして「いきのを」は「命」ではなく、恋情における「こころ」の活動をあらわした、「心に乗る」のように、対象となる相手が常に離れない情態、想いの極限状態と考える。そしてその身体作用が「嘆息」としてあらわれる。

最後に「いきのを」が中古以降用いられなくなった理由について付言する。[14]中古以降、「いきのを」は

・あふことを　いきのをにする　身にしあれば　たゆるもいかが　かなしと思はぬ　（『和泉式部集』八九）

・いきのをの　たえなむいのちは　君にても　あはれいづこと　我をたづね　（『伊勢大輔集』一五二）

・日にそへて　思ひみだるる　いきのをは　今一たびも　みてやたえなん　（『堀河院百首』一二〇六）

・いきのをに　君が心　したぐひなば　ちへの浪わけ　身をもなぐがに　（『松浦宮物語』一四）

「思ふ」や「恋ふ」を修飾しない例が多くなる。『和泉式部集』の用例は、「いきのをにして」は共通するものの、『和泉式部集』における「いきのを」の例は、「絶ゆ」にかかり、「命」や「命綱」としての意味が読み取ることができ、『萬葉集』の例とは全く異なる用法といえる。

中古以降「いきのを」は、語形上「いきのをの」「いきのをは」と助詞「に」以外で「いきのを」が表現されるようになる。さらに「緒」の縁語である「絶ゆ」「乱る」と共起するようになると、「息の緒」は「玉の緒」の表現構造と極めて近似したものとなる。『伊勢大輔集』や『堀河院百首』は、「いきのを」を「たまのを」に置き換えても

通じ、「いきのを」が「たまのを」と同じ表現をなしていたことがわかる。「乱」「絶」が「命」を対象とすることから、中古以降の歌人にとって「玉の緒」ならびに「いきのを」は、『萬葉集』とは異なり、「命」をあらわす歌表現になっていたと推測する。「命」は「いき」よりも「たま」（玉／魂）と結びつきやすくり、「いきのを」は「たまのを」にその位置を奪われたものと想定することができる。また近世の『萬葉集』「いきのを」の理解において大きな影響を与えたものと推測できる。

繰り返すが、筆者は『萬葉集』における「いきのをに」の解釈としては、「心」における情動作用が、「息づく」等、身体にまで作用するほどに、対象となる相手を思い続けていることをあらわす表現と考える。すなわち想いの極限状態といえる。「いきのをに」を意訳するならば「思ふ」「恋ふ」を修飾するものは、「心が奪われて思いが嘆息となってでるほどに、」また「いきのをにする」や「嘆く」を修飾するものは「思ふ」や「恋ふ」を包含する「想いがあふれでるほど心から離れず」のような意訳になろうか。

注

1、『萬葉集』は、『補訂版　萬葉集　本文篇』（塙書房、一九九八年）を用いた。以降の『萬葉集』の引用ならびに用例数も同様である。なお訳文は筆者による。

2、『古今和歌集』において「いきのを」は使用されない。

3、『萬葉拾穂抄』（新典社）

4、『契沖全集』（岩波書店）

5、原田留美「万葉集の「息の緒」について」『成蹊国文』三八号、二〇〇五年

6、⑥の「息」字も一例であり有標とみることができるが、『玉篇』に「気息也」とある。そのため、「息」は「氣」の変え字である可能性が考えられる。

7、萬葉集叢書　第四輯『萬葉考槻乃落葉』（古今書院）

8、武田祐吉「いまのをつづ考」『萬葉』十七号、一九五五年

9、下河辺長流『萬葉集管見』も「いきの緒に思ひし君」における「継続性」について指摘している。

「いきの長くして、絶ねは、いきの緒とはいふ也。上に注する、けなかく戀るなとよめるに、同しことなり。」（六四四番歌、注）

10、「～の緒」には「今の緒」（20四三六〇等）も考えられるが諸説があり考察の対象から外した。また「伴の緒」も「緒」と記された例は一例であり、他は「雄」「男」「壮」をあてていることから、男子であることを表現として表示していると考えられ考察の対象外とした。

11、秋本吉郎「萬葉集「玉の緒ばかり」考」『語文』十五、一九五五年

12、澤瀉久孝『萬葉集注釋』中央公論社、一九六三年

13、「絲中傳意緒、花裏寄春情」（琵琶詩）。「情」と「緒」とが対になっている。

14、以下、『新編国歌大観』の本文ならびに歌番号による。なお『新編国歌大観』によると「いきのを」は五十二例、「たまのを」は三百五例みられる。

（すずきたかし）